

484

!!よせ悟

特 246

889

次の大戦争

海南隠士著

10巻



0055767000

0055767-000

特 246-889

覚悟せよ次の大戦争

海南隠士・著

東亜書房

昭和 11

AJB

1

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月14日付で文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特 246
889

海南隱士著

覺悟せよ次の大戦争

東京東亞書房



序

世界各國の軍備と、科學の粹を誇る新兵器とに就て、一瞥を與へて見よう。勿論それは、各國が公式に發表した範圍内に於てである。

——吾人は、人類の最大悲慘事たる戦争を豫想する者でもなく、又期待して居るのでもない。戦争は極力避く可く亦、防止すべきものである。然し、いつ如何なる機會に、戦争が勃發せぬとも限らぬ。日本國民たる者、常に、奮起と覺悟を忘れてはならぬ。本篇は、近代人の常識讀本とも云ふ可きもの——敢て御高讀を俟つ所以である。

海南隱士識

目次

一、世界列國の軍備状態……………	(五)
二、太平洋上いよ／＼多事……………	(二二)
三、航空母艦について……………	(二六)
四、空中巡洋艦その他……………	(二〇)
五、爆撃機について……………	(三〇)
六、科學者の夢に非ず……………	(三六)
人造人間——電氣砲の威力——空中軍艦と空の敷設雷——陸上軍艦——	
地中の大砲戦——殺人音波——重寶なテレビジョン——燒夷彈——菌彈	
七、覺悟せよ次の大戦争……………	(五二)

一、世界列國の軍備状態

嘗て、前獨帝カイザーが、和蘭ドウルン城の奥深く、悶々の情を抑えて、故國の空を眺めつつ次の如き言をして居る。

「予の意見に依れば、一九××年には、もう一度恐るべき大戦争が起るに違ひない。そしてその戦争は、ホンの數日間か或は數十時間で終結するだらう。宣戦布告と同時に、飛行機、飛行船、潜水艦から成る、彪天なる部隊は、無線に依りて出動を命ぜられ即座に、敵の商船を撃沈し、戦争準備なき國家は、四十八時間以内に、滅亡するだらう。又陸海上に於ては、新しい毒瓦斯や、爆彈が使用されて、弱い國は、瞬時に滅亡するであらう。」

果して次の大戦争は、數日或は數十時間にて局を結ぶかは別問題としても、此の豫言は、將來の科學戰に裏書きするものであり、あらゆる科學の精銳兵器による、大戦鬪を喝破せるものである。

いま茲に、世界列國の、陸海軍勢力を記して見よう。

陸軍勢力

(國名)	(飛行機數)	(高射砲數)	(戰車數)
日本	約一、〇〇〇	—	約一、〇〇〇
露國	二、五〇〇	不詳	二、〇〇〇
英國	一、五〇〇	五〇	二七〇
米國	二、三〇〇	二〇〇	五〇〇
佛國	三、〇〇〇	一六〇	一、五〇〇
伊國	一、五〇〇	一四〇	一二〇
獨國	—	—	—
——條約上禁止——			
日本	約二十三萬	—	—
英國	同三十四萬	—	—

その平時兵力は——

海軍勢力

(日本)	戰艦	噸
主力艦	九隻	二七二、〇七〇噸
舊式戰艦	〇	—
巡洋艦	十二隻	一〇七、八〇〇噸
級 A	十九隻	九〇、二五五噸
級 B	四隻	六八、三七〇噸
航空母艦	—	—

米國	同	三十二萬
佛國	同	五十六萬
ソヴェート聯邦	同	百三十萬
中華民國	同	二百二十萬
獨逸	同	二十五萬
伊國	同	三十五萬

(米 國)		(英 國)		(佛 國)	
主力艦	戰艦	主力艦	戰艦	主力艦	戰艦
○	舊式戰艦	○	舊式戰艦	○	舊式戰艦
十五隻		十五隻		十五隻	
四五五、四〇〇噸		四七四、七五〇噸		一八三、三九六噸	
巡洋艦	A 級	巡洋艦	A 級	巡洋艦	A 級
十五隻		十五隻		十九隻	
一四二、四二五噸		七〇、五〇〇噸		一九九、一七〇噸	
B 級		十隻		三十二隻	
七〇、五〇〇噸		四隻		六一五、三五〇噸	
航空母艦		航空母艦		航空母艦	
四隻		四隻		六隻	
九二、〇〇〇噸					

(伊 國)	
主力艦	戰艦
六隻	舊式戰艦
一三三、一三四噸	
巡洋艦	A 級
十隻	
一〇五、九二三噸	
B 級	
七隻	
四五、九二八噸	
航空母艦	
一隻	
二二、一四六噸	

×	
主力艦	戰艦
四隻	舊式戰艦
八六、五三二噸	
巡洋艦	A 級
十隻	
九七、三四二噸	
B 級	
十三隻	
五二、六七八噸	
航空母艦	
ナシ	

右は百科辭典に依る統計數字である。勿論概略を示したものであるが、^{おほむか}大方の全貌が^{せんぼう}お判りの事と思ふ。

「備あれば、患無し！」

國防なき國家は、噴火山上に、或は、薄氷上にあるのと同じである。

軍事専門家の言に俟つまでもなく、將來若し不幸にして、戦争の勃發を見る場合に於ては、海に——空に——陸に——、現代科學の凡ゆる粹を應用し、その國の凡ての物資と、全國民の全智全能とを遺憾なく發揮し、是に當るべきは、當然の業務であつて、同時にまた、戦争より受くる惨害の度も、既往のそれと、大いに、趣きを異にするであらうことは、容易に想像される。

x

列國が、今や、經濟不況のドン底に呻吟しながらも「軍備の擴充」に餘念なき所以も、明かに此の事實を物語つて居る。

幸か不幸か、我國は、歐洲諸國の如く、空襲による爆彈や、焼夷彈の悲惨なる洗禮を受けて居らぬ。従つて、戦争による、惨禍の程度に對して、十分の認識と理解とを持つて居らぬ。

然し想起せよ！ 去りにし關東大震災の惨狀を。戦慄そのもののかの大地震、猛々たる煙炎々たる焰——天地晦冥——阿鼻叫喚の裡に、人も家も都市も、一瞬にして、灰燼と化したでは

ないか。

星暗き雨の夕に、爆音はすれども、その姿を見せざる敵の空襲に怯へ、國民は學つて地下室に閉ぢこもり、刻々近づき来る空魔の唸りを聞いた時、民心は果してどうであるだらうか。

歐洲大戰の苦難をなめたる彼の國の人々の胸中は、不安と恐怖とに、果して、どうであつたらうか。

天變地災は、如何ともする能はず、しかも國際間の變動も亦、自然の勢に屬して、戦雲は、思はざるに勃發する。

x

覺悟せよ！ 次の大戦争！

再び叫ぶ！

「備あれば、患無し！」

一、太平洋上愈々多事

一一

一國の國防が、陸海軍人と、兵器とに限られたる時代は、すでに過去の歴史となつた。今や戦争は、それを支持する凡ゆる分子に、誰彼の差別なく全面的に攻撃の矢を向けらるゝに、至つた。従來の所謂銃後の人にも、軍人それ以上に銃前にさらさるゝの状態となつた。

換言すれば、敵機の空襲である。

陸においては、タンク（戦車）

海にあつては、潜水艦、

そして、陸、海ともに、飛行機の活躍——この航空機の進歩——爆彈、瓦斯彈、燒夷彈の威力の増大、空襲法の發達は、誠に括目すべきものがあつて、歐洲大戰當時とは、雲泥の差がある。

今後——益々發達するであらう、凡ゆる科學兵器の中で最も怖しいものは「空中の武器」である。

空に國境はない。

空魔は、悠々と、空を飛んで、目指す敵地に——暴虐の限りをつくして飛び去る。

地上において、切齒扼腕しても、何にもならぬ。

讀者よ！ 筆者と共に、

目を、茫漠たる太平洋の荒浴に轉じて頂きたい。

x

米國と支那との間の太平洋定期航空——これは、米國の汎米航空會社といふのがやるのであるが、最終の支那の着水地の問題が、また少しゴタ／＼してまとまらないので、米國からフィリッピン迄やつたのである。——が、これがいよいよ始つた。

第一回は、昨年十一月二十二日（米國の日付で）サンフランシスコを出て、二十三日にハワイのホノルル着——これは夜間飛行——それから二十四日にそこを出て、同日ミッドウエー島着、その二十五日發同日（東洋の日付で二十六日になる）ウエーキ島着、その翌日出て、グアムへ着き二十九日は、グアムを出て同日マニラへ着いた。

歸りは、十二月二日にマニラを出て、グアム、ウエーキ、ミッドウエー、ホノルルと前の逆

に飛んで、十二月六日午前サンフランシスコ、アラメダに歸つた。

第二回は、十二月九日に出たようであるが、こうして將來は、大體一週間に一回の飛行（兩方）をやる腹である相である。そしてこの本式の飛行をやる前には、前に述べた各地の設備に力を入れる外、別の型の飛行艇で、念入りに試験飛行をやり、その中に本式の飛行艇が出來たのでそれでやつた。途中、何の故障もなく見事やつたのは見上げたものだ。そして、廣東まで連絡するものとすれば、八六〇〇哩の新航空路が出來上つたわけである。この大飛行に使つた飛行艇は、マーチン一三〇型といふので、それをチャイナクリツバーだとか、フィリツピンクリツバーだとかいふ個有名詞をつけてをるが、八百馬力の發動機四基をつけて、單葉機で、翼の幅が、約四十米、長さが約二八米、高さが、七米半、自重が、一〇四噸、全重量が二三噸といふ大きなもので、四十六人の御客をいれる事が出來る相だ。最大速度は、一五七節、巡航速度で三千五百海里も飛べるといはれてをる、スバラシイものである。

斯様にして、あの廣漠たる太平洋も、東の端から西の端まで立派に空の路が、出來上つた。またやがては、米國と濠洲とを連ねる航空路も出來るだらうと云はれて居る。

x

この話を聞いて、讀者諸君！ 何と思はるゝや。最後に残つた太平洋上の定期飛行もいよいよ出來たのだ。日本の南の方を一氣に、三千五百海里も飛べる大飛行艇が、涼しい顔をして飛んで居るのだ。

神洲帝國を、横目に睨みつゝ――。

航空路が出來る。それは平和な通商事業である。が、しかしそれらの貴重な經驗、急速には出來ない設備は、有事の時は、直ちに、實に重要な役目をするのだ。皇國の海外航空路は、まだ一つもない。――ある國が、ある航空路を拓く。そのあとへ他の國が、ノコノコ出て行つて自分も仲間入をさせてくれ、といつて、誰がハイハイと承知するものか。自分の力でやる。この外にはない。

南洋には、日本にとつて、實に大切な澤山の島がある。がしかし、それらを連ねる何の空路も出來てゐない。島民の生活を一層楽しいものにしてやることから云つても、これは是非其實現すべき問題であらう。

太平洋！ 南洋！

そして大空の大道！

もうぐす／＼してゐる時ではない。米國の大きな飛行艇、二十三馬力もある。三千二百馬力もある。巨大なものが、神州大帝國を横目で睨んでブン／＼飛んでゐるのだ。

吾等の大飛行艇が、四六時中、太平洋上を東へ西へ南へ北へと飛び廻つてゐる様に早くせねばならぬ。そして、それは、全國民の任務である。他人の事では決してない。國民全體が、協力一致して、帝國の航空發展のために、ありつたけの力を出さねばならぬ。

太平洋上いよ／＼多事。

太平洋の浪は、常に高い。

讀者の自愛自重を祈る眞に切なるものある所以である。(本章は、大日本飛行少年團發行——制空第二卷第三號所載、某大佐の談話記事に預る所多し、謹んで謝意を表す)

三、航空母艦について

航空母艦こそは、海に於ける、空軍の本營である。各國は、それについては、深甚なる研究と警戒を常に怠らない。

x

過般の軍縮會議に於て、日本のように、「本當の軍縮の精神」によつて、他國を脅威もせず、又他國からも、脅威されない、眞の軍縮をやらうとする國は、航空母艦を、攻撃的の艦種と見てその全廢、全廢が出来なければ思ひ切つた縮少をやらねばならないと、主張(然し他國が同意しなければ、自分だけやるといふわけには無論いけないが)するが、胸に野心を藏する國では、そうは云はない。

そこで、何故、航空母艦が、攻撃的の艦種であるかといふ事であるが、本來の航空母艦は、攻撃力も防備力も、運動力も、左程まで大きなものとはいへない。

米國のサラトガ、レキシントンの二隻は、二十センチ砲を積んでゐるが、その他の航空母艦はもつと小さい十五センチ以下のものであるから、大した攻撃力とは云へない。防禦の方も運動の方もさうである。それはそういふ方は出来る丈我慢して、一方で出来るだけ強大な空中兵力を持ちたいからである。そこで、その強大な空中兵力——即ち、多數の飛行機、就中、攻撃機があるによつて、航空母艦が、攻撃的の艦種であるといつても、素人向の見方としては、それでいい。

航空母艦は、主力部隊と一緒に——時には別に——行動して、主力部隊の目となり、耳となり、搜索、偵察、警戒といふような仕事をやるが、さていよく敵の主力部隊を發見すれば、その持つてゐる飛行機、就中攻撃機を大撃進發せしめて、爆弾や魚雷で、強烈の攻撃を散行する。どう見たつて、航空母艦は、攻撃用である。又國土防空といふ方を考へて見ても、航空母艦から出た飛行機が、爆弾の雨を降らさなければ別に大して痛いわけでもなからう。

航空母艦に、攻撃機があつて、それが、火の玉を落すものだから、守る方としてボンヤリは出来ないのだ。

これから考へても、航空母艦は攻撃用と見てよい。

凡そ軍備は、その攻撃的威力がなくては、否強くななくては、勝利を得る事は出来ないから、大小強弱の差はあつても、攻撃性能のない艦種はないが、大觀して、攻撃を本來の生命とするものを、攻撃的艦種と見、國防の全體から見て、敵の來るを受けて、攻撃移轉を目途とする潜水艦の如きを、防禦的艦種と見るは、當然であらう。——

さて、我國の提案が、そのまゝ通つたなら、やがては、航空母艦なるものは、影を消すかも知れぬが、實際は、今後どうならうか、どんなものが出て來るであらうか。

大きさからいつても、今までの條約では、

二萬七千トンが止まり、但し、米國のサラトガ、レキシントンだけは、特別の取計らひで、三萬三千トンとなつたが、今年（一九三六年）で、滿期打切となる。條約が消へてしまへば、一體どんなものが出て來るだらうか。

四萬トン五萬トンといふ様な途徹もないものが出て來るであらうか。

それとも、六千トン七千トンといふ様な小さいので、數でこなすといふ風にならうか。將又その中間の二萬トン級、今米國が造つてゐる、エンタープライズ、ヨークタウン（何れも二萬トン）の様なもの一般的なとならうか、中々、むづかしい問題である。

何といつても、海軍としては、海上の大空中兵力を持つて居なければならぬ。軍縮會議でこの國も一律に航空母艦を全廢すれば、問題は別だが、こゝろいふ約束が出来なければ、海上部隊の手足耳目として、絶大の役割を行ふ、航空兵力を輕視したら、もうおしまひだ。

軍縮會議で、日本は大きな目から見て、航空母艦の如き攻撃的艦種は、全廢然らずんば徹底的の縮減を論じたとして、それでは、航空母艦は、役に立たぬものか、など、勘違ひしては、斷じていけません。

——航空母艦は、實に恐ろしい強い役割をやるものだからこそ、そういふ強大な勢力のあるものは、各國共やめにして、お互ひが、他國から、脅威を受けないようにしようではないか。——といふのである。

——だから、こういふ穩當主張おんたうしゆちやうが通らず、依然として、航空母艦が、しかも制限せいげんなく残つてゐるものとしたら、その價値を正しく認識にんしきして國防上必要な量を、確しやと持つて居なくてはならないのである。

四、空中巡洋艦その他

ソヴェート聯邦の軍備状態ぐんびじやうたいには、實に驚く可きものがある。たしかに、列強が驚異きやういの眼を睜ひらるのも、蓋し當然ではある。

前章に對稱して、

ソヴェートの空中巡洋艦といふのから、先づ説明して行かう。

x

空中巡洋艦——即ち、巨大なる飛行機である。これについての、詳細なる機構は、發表はつぷされてないから、書けないが、——軍隊、兵器、糧食りやうじきの空中輸送が、日進月歩の勢ひで、スバライシイ飛躍ひやくだつぶりを示してゐることは、全く驚くの外はない。

次に、赤軍の新戰術しんせんじゆつとして、特異の威力をもつ——「パラシュート陸戰隊」。

これは、機關銃、小銃、ガスマスクなどで武装した千名二千名の兵士が、パラシュートで大量降下するものであるが、ソ聯赤軍では、これを、「海軍陸戰隊」に對較して、「空軍陸戰隊」と稱してゐる。

この戰術は、まだ實戰に、應用されたことがないから、果して、どれだけの効果を擧げうるものか判らない。

赤軍内せきぐんないで、パラシュート術の練習れんしゆが廣く行はれたのは、つひ、三四年前からのことであるが最近では、各軍管區かくぐんくわんくとも、多數のパラシュート教官、パラシュート兵へいを有し、一九三×年九月には、キエフ軍管區の大演習にこれを大々的に試験し、千二百名、二千五百名のパラシュート部隊が、武器彈藥を携へて、一齊降下し、敵軍の背後を奇襲する演習をやつたが、一つの事故も起らなかつた。

パラシュート落下には、單純落下といつて、普通に傘を開いて飛び下りるのと、複雑落下または閉傘落下といつて、地上近くまで傘をつぼめたまゝで、飛び下り途中で傘を開いて飛び下りるとあるが、更に、宙返り、キリモミ、急旋回など高等飛行をやつてゐる飛行機から落下するのがあつて、パラシュート兵は、これらを修得することになつてゐる。

現今、パラシュート界では、軍隊といはず、民間といはず、右の閉傘落下と共に、「高空落下」と「低空落下」のレコードを作る競争が、行はれて居る。「高空落下」では、婦人パラシューターで、酸素吸入器を用ひず、七千九百二十三メートルの高空から、無事に飛び下りた者がある。

x

次に、ソ聯赤軍が特に力をいれてゐるものに、タンク及び、毒瓦斯がある。

飛行機は、赤軍最大の誇りであるらしい。その現在數約五千と號し、その中、七八百臺が極東方面に集中されてゐる。

タンクは、最初さかんに、小型のものを製作したが、今後の實戦では、タンクは、タンクと戦はねばならぬといふので、大型タンクの製作に熱中してゐるさうである。

アムールを泳いでわたるといふ、水陸兩用のタンクも、あるといふから、若しも、日本海を超えうる、最大のタンクでも出來たとしたら、科學兵器として、最高とならう。

x

毒瓦斯の製造は、モスコ、ポーブリキ、ベレスニキー等に於ける、肥料製造工場で、旺んに製作してゐる。表面は、肥料製造といふことで、やつてゐるが、肥料に使ふ化學藥品の少からぬ部分は調合の仕様一つで、毒瓦斯となることである。

世界の六分の一を占むると傲語してゐる、ソ聯邦の農村に供給される肥料のことだから、その數量は莫大なもので、従つてその一部分が毒瓦斯に化けるとしても、大變なものであるからこの毒瓦演製作については、列強の何れもが、恐畏してゐるのである。

x

次に、現在、ソ政府が、四千三百キロにわたる滿ソ國境一帶に新設した、自慢の小型堡壘がある。

これを、空中から展望すれば——ベタ一面に、饅頭形の物がバラ撒いてある。大は釜を伏せたような、小は、茶碗を伏せたようなもの、——といつて良い。——河の傍にも、丘の上にも

目茶苦茶に轉つてゐる。鐵條網が、稻妻型に、河岸から丘へかけて、幾重にも取巻いてゐる、凄^{さい}い防禦陣風景だ。

その釜や、茶碗^{ちやわん}を伏せたようなものは、何か——トチカと稱する、豆堡壘^{まめぼり}なのだ。

トチカとは、點といふ意味のロシア語で、「トチカ堡壘」は、一二挺の機關銃^{くわんかんじゆう}もしくは、小口径の砲を据附けるに足る、小型の砲臺であつて、その全體が地下に埋没し、地上には、たゞその圓頭部を露出するのみである。この「トチカ」が、黒龍江や、烏蘇里江の對岸の要所々々に散在^{さんざい}してゐる。從來、前線の堡壘は、多く細長い帯——もしくは、縦横の綫型の塹壕^{せんごう}線によつて固められたものであるが、歐洲大戰の經驗^{けいけん}は、この種の砲臺よりも、點々散在する、綫型の各個立した小型砲臺、即ち、「トチカ」の方が、防禦力が強いといふことを教へた。

ソ政府實施のこの「トチカ」こそは、即ち現代要塞技術における、最新式を用ひたものと云へるのである。但し普通堡壘は、對手方に見えぬのが常であるのに、ロシアの「トチカ」は對手からハッキリ見えるものが多い。

「トチカ」に對しては、その面積^{めんせき}が、僅か八疊か十疊^{じゅうせう}敷位の圓形であるため、空中からの爆撃が効かない。滅多に命中^{ちゆうちゆう}らない。中^{あた}つても、別のが、完全に生きてゐる。早く云へば、昔の要

塞を、合理的に分解したもので、現在、フランスが、獨逸側に築いてゐるのも、やはり「トチカ」である。「トチカ」の圓頭部は、毒ガスをかけてもハネ返すといふことだ。〇〇センチ以上の砲彈でない^{ない}と、破壊できないとの事、一發〇千圓の砲彈である。中^{あた}らなければ、〇千圓、ハハになる。この「トチカ」に向つて、攻撃する^{こうげき}としたら、想像^{さうぞう}以上の慘戰^{さんせん}になるであらう。

以上、部分的に、その武器について、書き終つた。今度は、總括的に、書いてみる。

ソ聯中央當局が、如何に、極東國境線^{ごくとうこくけいせん}を重視^{じゆうし}してゐるかは、一九三五年十一月二十日に、發布された、「赤色陸海軍の新職制」^{しやくしきりくかいじんしんしやくせい}を見ても判る。

國防人民委員長、ウオロシロフ、同次長、ツハチエフスキー、參謀總長、エゴロフ、騎兵監^{きへいけん}ブヂョンタイと共に、極東軍司令官ブリューヘルの五名を元帥に拔擢して、赤色軍最高幹部の陣容をととのへ、又海軍に於て、一等艦隊將官^{いとうかんたいせうくわん}に任ぜられたのは、ヴィクトロフと、赤色海軍部長ウオロフの僅か二名にすぎなかつたことによつても、明かに看取^{くわんしゆ}される。

滿洲事變後の、滿ソ國境線に、逐年増加された、輕要塞トチカは、その數を知らない。そのトチカの彼方には、空陸のあらゆる近代兵器で武装した特別赤旗極東軍が、二十萬以上の獨立した大軍となつて雲集してゐる。

この空陸軍と相俟つて、ウラジオ港を根據地とする太平洋艦隊は、數十隻の潜水艦を擁して居る。又國境諸川の警備をやつてゐる、黒龍江赤旗河砲艦隊も、侮り難い勢力を示してゐる。

赤色軍の、この十八年の間に、その裝備と訓練に於て、著しい發展を遂げたことは、世界列強等しく驚異の的とする所である。

特に、この最近三年間の擴張強化は、凄いスピードである。國防次長のツハチエフスキー元帥が、ソヴェート議會に報告した所に依ると、ソヴェート政府は、國防費として、一九三×年度に、五十億ルーブル、一九三×年度に、八十二億ルーブルを投じ、そして次年には、百四十八億ルーブルといふ巨額を計上してゐる。そしてこの國防費は、主として、裝備の改良、東西國境の築城、海軍の復興、赤色軍の兵力増加の四ヶ條に投ぜられてゐる。

赤色軍は、革命初年の内亂鎮定、列國干涉の抑撃が、一段落つて以來、逐年兵數を減じて居たものだが、最近になつて、急激な増兵を決定してゐる。その常備兵力は、一九三×年に於

て五十五萬から九十四萬に、一九三×年には百三十萬に増加された。本年中（一九三六年）には、恐らく、百五十萬に増加されるであらう。百五十萬の常備兵と云へば、云ふまでもなく世界一の大陸軍である。

然らば、この異常の軍備強化は、何に因るかといふに、それは、ソヴェート首相モロトフ氏や、國防委員長ウオロシロフ元帥等の公言した内容で、説明されてゐる。

「今や、ソヴェート聯邦は、西ドイツ、東日本から、同時に、脅威をうけてゐる。従つて、西と東の兩方面に對し、軍備擴張の必要に迫られたからである。」

即ち、日本及ドイツを、假想敵國としてゐることが、漠然と判る。

×

極東地方に於ては、一九二×年、赤旗軍の戰鬥部隊と、チエーカー（ゲー・ベー・ウーの前名）の部隊から、「國境警備部隊」といふのが、編成された。

國內の反革命運動を取締ると共に、國境警備の任に當り、時には、軍隊と同様に、猛烈な戰鬥に参加したものである。

極東地方には、沿海洲、サガレン、カムチャツカなどに、長い海境があるので、國境警備部

隊は、多数の快速汽艇、監視船を擁して、海上の國境線を監視してゐる。

最近、頻々たる、滿ソ國境紛争で、いつも、姿を現はすのは、赤軍部隊よりも、この内務人民委員部に屬する、國境警備隊である。

彼等の多くは、狙撃の妙手から成り、夜といはず晝といはず、國境の谷間、樹間、森林中の各所に小部隊をなして、兎の走る灌木の葉づれにも、聽耳をそばだてながら、鶉の目、鷹の目で、國境を監視してゐる。

極東地方國境警備部隊の總兵員數は、不明であるが、その總指揮官は、一等國家安全委員の稱呼を有する、デリバスといふ男である。

一九三〇年二月、ソ聯中央執行委員會は、議長カリーニンの名を以て、彼の爲に數々の殊勳を表彰するため、ソ聯の最高勳章たるレーニン章、(次は、赤旗章、赤軍章、名譽章の順)を、授與したものである。

x

本章の局を結ぶに當り、

ソ聯軍備二總帥の略歴を述べることにしよう。ソ聯邦の、空陸軍備を一手に總帥するのは、

我國にもひろく、その名を知られてゐる、ブリューヘル元帥で、海上防備の首腦は、一等艦隊將官(海軍大將に當る)ヴィクトロフである。

ブリューヘル元帥は、帝政軍の一軍曹から身を起し、十月革命後、赤色軍の建設に奔走し、またドウトフ、コルチャツク、ウランゲル等の白軍討伐に當り、到る處で戦功を樹て、赤色軍中最初の赤軍受勳者として有名である。

それよりも、彼が、世界的にその名を擧げたのは、支那革命の際、孫文に招かれて、廣東革命軍の教官となり、ガロンといふ匿名の下に、同軍を指導し、その北伐成功に少からぬ役割を演じた時である。その後、支那國民黨が、容共政策を放棄するや、ブリューヘルは、本國に引上げ、間もなく、極東軍司令官に任ぜられ、同職にあること既に十年、今日に至つてゐる。

太平洋艦隊司令官ヴィクトロフ氏は、最初帝政バルチック艦隊主力艦、グラジダニン號の舵手に過ぎなかつたが、革命勃發後は、巡洋艦オリョグ號の副艦長より、驅逐艦の艦長となり露都に迫るイギリス艦隊を激撃したり、反革命派に大打撃を與へたりしてゐる間に、大いに海軍組織の手腕を見せて、戦争と革命とで、頽廢したバルチック艦隊や黒海艦隊を再建し、一九二六年から六年間に亘つて、バルチック艦隊の司令官を勤め、滿洲事變勃發の翌年、特に選ば

れて、極東の太平洋艦隊の司令官に任命されたものである。

五、爆撃機について

防空といふ言葉が、現はれてきたのは、極めて最近のことである。

われらが、帝都にあつても、本年で既に四回——防空演習が、行はれてきた。

防空とは、文字通り、空を防ぐことである。空を防ぐ——つまり、敵國の爆撃機の侵入を防ぐことである。

防空の最上の理想は、暴虐な敵の爆撃機を一機たりとも、その國土の上に、侵入せしめないことである。それには、先づ、こちらの方に敵國を壓倒するだけの軍備を持つてゐて、開戦と同時に、こちらから敵地に乗り込み、敵機の飛行場を襲撃して、悉く飛行場や格納庫や敵機を破壊してしまふか、或は占領してしまふことである。

しかし、これは、如何に最上の策だと云つても到底完全には、實行出来ないことだ。

そこで、第二段には、わが國土の上に、完全な防空の設備を施しておいてたとへ、敵機がわ

が國土の近くに現はれ、國內に侵入しようとしても、斷乎として、之を喰ひ止めることだ。

そして、敵機が未だ一發も、爆弾を投下しない前に之を撃ち落したり、又は撃退すれば宜しい。しかし、これだけで、も早、國民は、枕を高くしておられるかと云へば、決してさうではない。何分、敵の爆撃機が、活躍する舞臺は、縦にも横にも全く、垣のない大空なんだから、いくら防空設備を完全にしたところで、どこかの隙間をくゞつて、われ／＼の都市の上空に現はれないと、斷言することは、出来ないのである。

そこで、第三段として、われ／＼國民は、萬一敵機が、都市の上空に現はれたとしても、出来るだけこの敵機の爆撃を失敗に終らせ、或は與へられた損害を出来るだけ少くさせるやうに努力しなければならぬ。

以上を、ハツキリさせるために、まとめて、表にすれば、次のようである。

第一段の防空——敵軍航空隊根據地の占領

その手段——遠征軍

爆撃隊

第二段の防空——各種防空設備の完備

その手段——防空飛行隊

- 高射砲隊
- 高射機關銃隊
- 防空監視隊
- 聽音機隊
- 照空隊
- 氣球隊

第三段の防空——國民の直接防護

その手段——燈火管制班

- 消防消毒隊
- 偽裝班
- 警備隊

更に、筆をすゝめて、世界列強の、防空施設及び訓練に努力しつゝある模様を、左記して見よう。

△英國

英國は、大戦中、最も多く空襲を被りたる關係上、軍事上は固より、國民防空に於ても、もつとも眞剣である。同國に於ては、地方軍といふのがあつて、各種階級の志願中より募集したる者に、短期の教育を施し、一般軍備の一部を擔當せしめて居る。その中、防空部隊に當てらるゝ居るものは、「防空旅團」であつて、現在、二ヶ旅團編成されて居る。

防空旅團は、司令部高射砲聯隊二箇（一聯隊は四中隊）照空大隊一（四中隊）通信隊一箇から成つてゐる。そしてその幹部たる旅團長とか聯隊長とかは凡て軍人以外の者で、市會議員もあれば、辯護士もあり、會社の社長もあるといふ有様で、平常は、夫々自分の職業に従事してゐる。又、防空監視哨が市民により常時編成されてゐる。即ち、
「市民は、空襲により、生死に關する極大なる感動を與へられるを以て、監視又は警報を以て

軍部專任と思考するを得ず」との原則が、高唱せられて居る。

而して、その幹部には、警察官及この目的の爲に、召集したる特別警察官が、當つてゐる。この特別警察隊の中には、大地主、銀行員等もあれば、陸海軍の將官もあつて、全然平素の地位や階級は問題外にされて居ることである。しかも、監視哨の報告は、敵機發見より僅々二三十秒にて、防衛司令部に達する如く、訓練されてゐる。その他、防空施設の完備は、周知の事實であるから省略する。

△佛國

佛國に於ては、防空に關する軍部以外の業務は、内務省に設けてある「高等防空委員會」に於て統制することになつてゐる。同委員會は、關係各省の全部の代表者を網羅し、將官たる對防禦官之に任じてゐる。又地方に於ける對防空施設の研究は、各縣毎に知事之に當り、その補佐の爲中央と同じく、防空委員會を設け、關係各文官の代表者及若干の軍事要員を含めあり、此委員會の任務は、住民地又は、工業地帯に詳細なる防護施設を計畫する要ある場所の決定にある。

各町村に於いても、是に準じて、防護計畫が樹てられる事になつて居る。

重要なる工場、會社は、防空委員會と連絡し防禦計畫を作製することになつてゐる。防空業務實施の爲には多數の人員を要するが、佛國は、人口寡少なる關係上、此等の要員には、兵役業務に關係なきものを充當することになつて居る。又瓦斯勤務に従事する者は、専門教育を必要とするを以て、化學者、醫師、藥劑等をふくましむことになつて居る。尙、都市工場、停車場等の設備動力線の虚置などにつき、平時より着意すべき點は、豫め示して居る。

△獨逸

ドイツには、民間機關として、防空協會なるものがある。その本部は、これを伯林におき、支部を重要都市に設け、目下多數の會員を有す。本協會の目的は、輿論を喚起し、政府に對し必要なる防空施設を促さんとするにあつて、平時は、建築法、瓦斯防護法の研究をなし、且つこれが宣傳に力を注いでゐる。

最近、都市の辻々には、巨大なる爆彈の模型塔を充て、朝夕行路の人々に、これを目撃せしめ防空思想の宣傳に供し、又各國の防空施設防空演習の寫眞を蒐集し、これを、カレンダーに

利用し、盛んに、防空の必要を、鼓吹しつゝある。又一面、月刊雑誌を發行し普く、各種の認識理解に努めてゐる。

要するに、ドイツは、軍備の制限を受けある關係上、消極的防空には、非常なる關心と準備とを進めて居る。

△伊太利

イタリーに於ては、國土防空防禦は、一九二七年來、防護團義勇軍の一部隊に依頼せらるゝに至つた。その目的は、開戦の脅威をうくるや否や、數時間にして、緊要なる防空任務に必要な人員を動員し、且つ、國軍の過重なる任務を軽減するためにである。

この任務に専任する者は、相當の年輩に達せる在郷軍人並に十六歳——十八歳の青年を以て組織し、有事の時、監視哨、高射砲、高射機關銃隊等に、配屬せられ、防空部隊の一部となるのである。

この教育には、現役の將校又は、義勇軍専任將校之に任じ、日曜集會等を利用してゐる。

△ソヴェート聯邦

ソ聯邦に於ては、軍備特に飛行隊の充實に、非常なる努力を拂ひ一見異様の感があるが、就中、その國防飛行化學協會は、民間施設として、非常なる活躍をなしつゝある。又同國は、都市計畫又は工場地を建設する時、並にその擴張に際しては、次の事項の實行を命じて居る。

- 一、中央に大なる通路及兩側歩道に従ひ、街路樹を設くること、
 - 二、主要道路は、その土地の主要風向に平行して路上の通路を容易にし、瓦斯の停滞を防ぐこと、
 - 三、建築物は、道路よりその高さだけ離し、空襲よりする破壊に際し、街路を閉塞すること
なからしめ、又家屋相互も相當の間隔を與へ且つ建築集合體の後方に空地を有すると、
 - 四、國家の重要建物は、中央に集合せしむべからず、小なるものゝ集團を分置すべし、
- 其他、迅速なる燈火管制規定教育並に最高學府に防空講座を置き、學生に義務的に、聽講せしむることを要求してゐる。

是を要するに、列強は、各その國情に則する如く、軍部の施設と平行し、或は是と合體とな

り、防空施設及訓練に、努力しつゝある。これは全く、彼等の立場上、空襲の危険率の多き豫想に刺戟せられた結果であつて、今や、航空機の威力は、國の遠近、途中の障碍も、何等これを阻止する要件たらざる現況に於ては、わが國民も、一段の覺醒を必要とせねばならぬ。

六、科學者の夢に非ず

以上、各章とも、あまりに、科学的科學的筆法だから、讀者に、興味をつなぐ理由として、本章には、少々、面白可笑しく、既に、實現、或は、發表されたる、科學兵器について、説明を加へて見よう。

A 人造人間

「これが、嘆かないでられますか。——寄らば斬るぞ」と渡り合つた時代がなつかしい」「人間と人間とが、刀で、鎧よろぎを削つた時代がすぎて、機械と機械との戦争だ。人間が自ら作つた怪光線で自滅するナンテ馬鹿々々しいツてんで後世の人間は、自ら戰場には立たないね。」

「へエ。何がチャンバラをやります?」

「ロボットつて奴だ。人間は、人造人間を戰場に送る。澤山の死人が出来たと見えたが、それは人造の兵隊へいたいロボットだつたなんてことにならないとも限らない。」

「へえ、仙臺萩の仁木彈正に化けた鼠のやうなものですね。」

「さうなると、人無き戰場だ。今日既に、無電に依る操縦は、事實上可能なりと斷定されてゐる。飛行機も戰場には、すべてが、無線電波で線られるようになる日も來よう。百年もたてばね——」

「へエ」

「誰やらが云つたナ。——ハカリゴトを、帷幄の中に巡らし、勝を千里の外に澤す——とね、やがては、スキツチ一つで、五千軒も、一萬軒もさきの敵を、アツサリ片付ける時代がくるよ」

「へエ、たまげましたなア、ウ……」

「お、何をボンヤリしてるんだ。判つたか、防空演習の話をしてたんだよ。」

「どう理で、うはの空で聞いてきました。」

B 電氣砲の威力

四〇

「ま、よく聞き給へ。敵の根據地に、火山の爆發したやうな音がした。砲弾が飛んで來たのだ。その砲弾の旅行経路を辿つて見たら、それは戦線から三百里も後の陣地から、胡座をかいてゐる——電氣砲の口から吐き出されたものだつた——ナンテのは、凄いやないか。」

「へえ、聞いたゞけでも、溜飲が下りますね。」

「大砲は、八十センチといふ大砲の横綱格。その一つ／＼が、六七階のビルディングのやうな砲座の上に、ドツカと尻を据えてゐる。砲弾は五トンもあらうといふすばらしい代物、人力や機械力や水圧や空圧で込めるのではない。火薬の爆發瓦斯を原動力とするのだ。それは一九二八年、獨逸のフアリアルといふ人が、發明したロケットといふ奴で、やがて月世界旅行も出來ようと言はれてゐる。」

「その一番のりが、僕の新婚旅行だつたナンテになると、大いに愉快ですな。」

「おい／＼、シヤレチャいけんよ。その頃になれば、今でこそ、それ防空の耳だ眼だとチャホヤされてゐる聽音機や照空燈なんかも、早引退してゐるな。」

C 空中軍艦と空の敷設雷

「君、今後の飛行機の發達こそは、實に脅威に價する。而して、空軍こそは、將來戰を決定づけるものだ」

「成程、そいつは、名論だ。事實、飛行機は何十年の後には、前進は勿論、背進も自由自在、百人のりや二百人のりはおるか、着陸すると翼を脱して、大型戦車の用務を果す、空中軍艦になつてしまふ。プロペラの音は消され、發動機の音もなく、別段廣い飛行場がなくつても、垂直に昇降が出來、空中での停留や乗換は、將來勝手次第だ。」

「そこで、僕も考へたんだが、あの阻塞氣球だね、アレ空中障碍だとか云つて、東京の周圍に頑張つてゐるが、アンナ原始的なものぢやなくつて、海の敷設水雷みたいなものが上空にあげられないものかしら」

「ウン、そいつを、考へてる學者はあるよ。空雷つて奴だ。空を見上げると、あちらでもこちらでもピカ／＼と稲妻のやうに光るものがある。見る見る濃々たる煙を吐いて、黒い物體が、バラ／＼落ちてきた。それは、敵の飛行機が味方の空中敷設雷にふれて、爆發したんだナ

てことになる。」

「小氣味が良いな。そうなつたら、防空演習もぐつと楽になる。そして、天下泰平々々。」

「所が、そうは、問屋が卸さない。その頃には今の戦車が、もつとく進歩する。現在でさへ水陸兩用戦車は、完成してると、飛行戦車も設計中だ。今に見る、戦車が、もぐらの真似をやり出すぜ、——さうなりや、防空問題ぢやなくて、防地殻問題がうるさくなるナ」

「さうすると何か。そのもぐら戦車が、對岸から海底や地中を潜つて来て、所かまわずヒョッコリ頭を出して、トタンに、攻撃開始するわけだね。」

「さうだ。そんなのは、小型だから、たかゞ甲蟲ぐらひにあしらつてやればいゝが、陸上軍艦などは、どうだね。」

「いよゝゝ未來派だナ。」

「軍艦とも砲臺ともつかない千トン位の奴が、グン／＼と大地に波を立て、山のように押し寄せてくる。その砲塔からは、軍艦の煙突を倒したやうな大砲が口をあけて、砲口を幾十と揃へて射撃だ。セメント樽のやうな砲弾が、バラバラと飛び出してくる。そんな怪物が、これまた地中を潜つて来たとしたら一體どうする？」

「馬鹿なそんな滅相もないことが出来るモンですか。」

D 地中の大砲戦

「所が、さうぢやない。昔の慢畫家が描いた兵器が、次々と實現してゆく世の中だ。」

「すると、そのもぐら先生は、頭に錐でも附けてゐるのかね。」

「自動掘鑿機といふ螺旋状の大きな圓筒が、土を掘り／＼進んで行くのだ。圓筒の一方の口からは、土が後へ／＼と吐き出されて行く。出来上つた坑道の壁には、撤水機のような自動車がコンクリートを吹きつけながら進む。コンクリートは直ぐ固まつて、隣く間にトンネルが出来る。トンネルの一つ／＼の先頭は、練兵場のように擴げられる。」

「さあ、それからが大變だ。」

「地中聽音哨が——隊長、敵が地中を進んで参ります——念には及ぶ、こちらにも潜りこんで居るゾ」なんて掛合ひがあつて、それから地中で龍攘虎搏の大活劇だ。」

「何とね、まるで、キングスネークの格闘だ。——喰ふか喰はれるか？」

「ませ返しちや、いけない。グワラ／＼と云ふ齒車の音が、地中に聞える。何本ものエレベ―

ターが、深い地下をベルトのように昇り降りする。と見ると、ヌツとばかりに、地表數十の砲塔から、一齊に長い頭を出すか、ドドド釣瓶撃ちをする恐しく長い大砲——かと思ふと、又ヌツと頭を砲塔の中に引つ込めて、サ、エのやうにピツタリと砲塔の蓋をしめた。長砲はまた他の砲塔へ運ばれて行つた。地中要砦の中をさ。」

「何のことはない。丸ビル街の生埋めですね。」

「黙つて聞いて居る。地中ビルの往來には、自動車か、縦横に走り、列車砲を運行するレールが、生白く光つてゐる。エレベーターで、十數層の地下格納庫から曳き出された飛行機は、雲雀のやうに草の中から飛び出した。地中砲兵隊は、ビル街の周圍を取巻く地 戦隊へついた。地中では、砲戦が始まつた。敵は大口径の列車砲で、ビル街の破壊にかゝつた。ビルデイグ街は、その震動でゴウ／＼グワラ／＼奈落の地震のやうな騒ぎだ。」

「あゝ、もう澤山だよ。考へただけでも、耳鳴りがして叶はん。君、どこか、もの靜かな戰場はありませんか？」

「そんなら、殺人音波などは、どうだ。」

「と云ふと——」

「兵隊がゲラ／＼笑ひ出す殺人音波だ。極端に高い音波——超々短波ともいふべき不可聴音波は、それ自體が人間の腦を冒すものだ。——突如、敵の陣營に異變が起つた。何萬といふ前線の兵隊が、俄かに、テンカン病みのやうに、慄へ始めたかと思ふと、今度は、ゲラ／＼笑ひ出した。何しろ、何萬といふ軍勢が、聲を合せて笑ふのだから物凄い。」

「へ、へ、へ、エヘ／＼へ、へ、へ、」

「おい／＼、そんなに氣分を出さなくつたつていゝよ。薄氣味の悪い奴だな。——その中、砲弾を二、三發見舞ひしたら、敵は一齊に異様な叫びを揚げて、哀れ不可聴音のため、腦の組織を破壊されて、全く狂人になつてしまつた。」

「もう少し強い不可聴音をぶつ放して、ひと思ひに殺してやつたらいゝぢやないか。」

「悪く、シャレルな。そこは、日本人だね。狂人になつた敵兵も一年もしたら回復するやう加減してあるんだ。殺人音波も活殺自在の劍さ。」

「へえ、その音無し劍法つてのは、やつぱり机龍之介直傳ですかい？」

「バカ、机龍之助は、科學者ぢやない。現代の科學者は、もつと進んだことを考へてゐる。將來は、殺人光線とか、怪力線とかいふやうなものに、敵がうめく時代も来るだらう。」

「さうすると何かね、神武天皇さまの御弓にとまつた金の鵄なども、その類ですか。」

「まア、そうだ。ともかく人間の光の威力に對する信仰は、古いものだ。歐洲大戰の時にも、

——暴力の霸王怪力線現はる——なんて見出しで、ゴシツプが出たそうだ。」

「へえ、何と出たかね。」

「伯林市中の全自動車ベリンが、一時に止つただの、巴里パリからルーミア通ひの飛行機が不意に動かなくなつたナンてね。何でも之は、驚くべき怪力を持つてゐる電波か光線らしい。ところが、その怪力たるや、人類が過去に經驗した大自然の、あらゆる暴力よりも強大なものだ。」

「へえ、地震、雷、火事、親爺おやぢよりも怖いか。桑原々々。怖る可きは、機械文明の力だ。」

E 重寶なテレビジョン

「何とか早く、遠くから、敵機を發見する方法はないものでせうか。」

「あるよ。」

「ありますか。」

「テレビジョンつて云ふ電氣應用の機械だ。之を防空司令部の參謀室さんぼうしつに据えつける。スキツチ

一つで、五千軒、一萬軒といふ遠い敵狀が手に取るやうにスクリーンの上に映るね。さうすると、參謀は、敵狀を逐一司令官に報告するな、——アツ出ました、出ました。敵の編隊飛行群です、百臺もありませうか。あつ又出ました。」

「撃ちました、走りました。ヒット／＼弾は轉々ライト。」

「おい君、野球やきゅう放送ほうそうぢないよ。」

「ホウそうか。」

「尙いけん。シヤレ給ふな。」

「だが、テレビジョンつて奴は、重寶なものですな。寝ながら、團十郎の芝居が見られたりして——あゝ、長生きはしたきものなり。」

「そんな時代もやがて来るよ。さうなれば、今でこそ防衛司令部ぼうえいしんれいぶには、情報送受信機だとか、地図板だとか云ふものが有つて、情報を集めてゐるが、あゝいふものは、お拂おひ箱ひらになつてしまふ。」

「僕たちも、棺桶くわんぼくに入つてゐる。」

「お拂おひ箱ひらになるものは、それだけぢやない。何十年先か判らないが、アノ防空兵器の花形

「高射砲なんかもクビになつてゐるな。」

「そりや、亦どうしてよすか。」

「いや、大砲が要らなくなるんぢやない。つまり大砲がもつと進んだものになつてゐる。」

F 焼夷弾

「次に、最も怖ろしい、火の玉の話をしようか——」

「何ですか、その火の玉つて云ふのは？」

「成程、爆弾も怖い、瓦斯弾も怖ろしい、だがその次に怖る可きは、この焼夷弾つて奴だよ。この焼夷弾は、テルミットといふ薬品を主剤とした爆弾で、これが点火したが最後、三千度に近い熱度で、全市を總焠めにして了ふんだ。日本のように木造家屋の多い國ぢや何と云つても大敵だ。」

「この世乍らの、焦熱地獄ですか。毛唐の奴えらいものを使ひ出しやがつたナ。」

「大昔にも火筋といふものがあつた、そいつが化學の衣を着て、歐洲大戰を初舞臺にデビウしたんだ。」

「へえ、タラ、ツタ……つてね。」

「こら、茶化しちやいかん。昔の人が考へた夢のような話が、科學の進歩した今日では、本ものになつて現はれ來たといふ意味だよ。アノ空襲の時に、街の上空を煙で蔽ふ發煙機、アレだつて、昔からとつくに考へてゐたことらしいぞ。」

「へえ、敵が來たら、墨汁を吹つかけるアノ烏賊にでも教つたのかな。」

「バカ云ふな、萬物の靈長が、烏賊になんか習はない。」

「イ、かにもすみません。」

「舊約聖書によれば——イスラエルの子孫達が埃及の虐政から脱出して涯てしなき流浪の旅にのぼつた——と思へ。」

「ルンペンの元祖ですね。」

「與太るんぢやない。——その時不思議や、彼等の前に在つて、曠野を導いたのは、壯大なる雲の柱であつた。しかもその雲は、彼等が停ればその面をよこぎつて背後にわだかまり、追手との間をさへぎりノ、無事に旅をつゞけさせた——といふ話だ。」

「そりや亦、いとも不思議な現象だね。アーメン——」

「茶々入れちやいけな。だが、日進月歩の世の中ちや、やがて、かゝる不思議な現象が、實現せんとも限らないよ、先達つてロシアで、曠い野原に霧を立ちこめる機械が發明されたそうだ。今に、晝間を暗黒にする考案が出来ないとも云へない。」

G 細菌 彈

「君こんなのは、どうですか。蜃氣樓應用だがね。不意に數十臺の空軍が、帝都の上空に押し寄せてきた。この時、忽然として、海上に、東京府と寸分違はぬ、大不夜城が現出した。偽都市の上には、敵の爆彈がボン／＼花火のやうに散つてゐた。ナンてのはどうですか。」

「妙案々々。そしたら、兩國の川開きでも見物するつもりで、——玉屋ア、鍵屋ア——なんて、援聲を送らうか。」

「だが、その頃になると、世の中も物騒になつて来る。依然として正義人道を辨へたのは日本ばかりだ。毛唐の奴等は、瓦斯彈や焼夷彈ぢや納まらないつてんで、國際條約を無視して、細菌彈を持つてきて、プチマクね。」

「そりや、サイキヤン耳よりな話だ。」

「しッ！ 靜かに／＼。赤い死の假面を附けた病菌は、研ぎすました死の鎌を持つて、眞黒な羽ばたきをしながら、未來の戰場へ歩き出して来る。毒瓦斯も、焼夷彈も、この頃は、忘れられた戦だ。コレラ、ベスト、チブス菌などいふ細菌が、やがて化學戰最後の覇者となるのだ。」

「おい、あんまり、オドカスなよ。昨夜冷ヤツコを喰べたばかりだからな。」

「だから、外國では猛惡な細菌を、より猛惡にするため、研究がつゞけられてゐる。だが同時に、これに對しては、特效藥ワクチンXなどと云ふ防禦の注射液も發見されてゐる譯だ。」

「成る程、すると、平時には、一切の傳染病が社會から除かれる譯ですな。」

「モチ——論。」

x

これは、一口噺や、落語では決してない。科學者の夢でもない。現代の兵器は、飛行機を始めとして、嘗つては、小説家や、科學者の夢の中に存在したものでありである。

戦争は、つねに、科學の母であり、乳房である。戦争は、我が、この夢を育て、新兵器を作り上げた。

以上かいた各兵器が、實現する日が無いと、誰が斷言出來ようぞ。

次の大戦争には、果して、如何なる新兵器が飛び出すか。各國は、目下、極秘裡に、色んな新銳武器を製作して居るといふから、必ずやその偉力たるや、恐異すべきものであらう。

七、覺悟せよ次の大戦争

國防は、現代人の常識である。國防なくして國家は存立し得ない。國家なくして、國民の生活は存立し得ないのである。

今日、我國の現状を觀察する時、國際的に極めて重大なる時局に直面し、その準備に、國防の絶對的安全を確保しなければならぬのである。

國民擧つて、この非常時局下の日本帝國を護らねばならぬ。

x

歐洲大戦争當時、各國の飛行機は、極めて、幼稚劣勢なもので、その性能威力に於ても隔世の感がある。それでも、彼我互に空軍の威力を發揮し、銃後の國民の心膽を寒からしめ且つ大なる

る損害を與へたのは、周知の事實である。

全國民よ！ 我國は、未だ直接、空襲の惨害を體驗せざるは誠に幸福であつた。されど我等は今や、あらゆる意味に於ける、國際的危機に臨んで、眞に、防空——國防を理解して、先進國のような苦い經驗に遭遇せざるやう努力したいと思ふものである。

x

若し、戦争が開始せられたならば、現在の航空部隊は勿論、精銳なる我陸海軍總動員の下に出動を見るであらう。

我等は、忠勇なる、戦闘員に對し、

「卿等は戦地に行け、御國の爲に、我等は國土に止り、祖國を守らん。」

この擧國一致、眞に國家總動員の成果をあぐる精神を以て、お互ひに協力しなければならぬ。

昭和の日本は、國防の完備によつて、國家興隆の發展を期し、以て東洋の平和を維持し、併せて世界人類の幸福を増進し、世界に冠たる皇道を、世界に布くは、昭和日本の生命であり、我等の重大なる任務である事を、茲に絶叫して息まないものである。(完)

御注文は 代金引替は御容を 切手代用は二割増に

御注文は 代金引替は御容を 切手代用は二割増に

五島富士夫著	二・二六事件の記録	定價十錢 (送料二錢)
海南隱士著	組閣難の真相 廣田内閣はどうなる	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄著	千波萬瀾の生涯・人間高橋景清	定價十錢 (送料二錢)
齋藤一耶著	遺難した内大臣 齋藤實とはどんな人か	定價十錢 (送料二錢)
頭山滿翁述	重大國事の秘密を語る	定價十錢 (送料二錢)
村田和雄著	歐洲の風雲・世界大戦は起るか	定價十錢 (送料二錢)
五島富士夫著	國際 世界各國珍聞奇聞集	定價十錢 (送料二錢)
滿蒙事報社編	謎の秘境・蒙古の全貌	定價十錢 (送料二錢)
秋本孝雄著	若返り法とホルモンの話	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	實話讀物・職業麗人純情集	定價十錢 (送料二錢)
斯波雪夫著	國際情緒・ハルビン物語	定價十錢 (送料二錢)
片山哲平著	映畫スタア千夜一夜	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	戰術奧の奧・外交は是て行け	定價十錢 (送料二錢)
加藤弘一著	軍事小説 爆彈・護れ祖國日本	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順著	世間の裏をのぞく	定價十錢 (送料二錢)
須山滿洲男著	風雲を孕む外蒙古	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝區三田四町二番六 東亞書房

早おく求め 全圖書店で販賣して居るす 切實のれは直接本房へ御注文

吉岡義一耶著	非常時日本の外交	定價十錢 (送料二錢)
高倉昇著	逆巻く太平洋	定價十錢 (送料二錢)
小牧琢磨著	財界巨星出世譚	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	怪奇犯罪實話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞編輯局編	見よ! 此躍進日本の姿	定價十錢 (送料二錢)
東亞編輯局編	常識讀本・人生百課事典	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	明朗爆笑大會	定價十錢 (送料二錢)
牧山九著	女スパイの暗躍	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄著	要領百パーセント戦法	定價十錢 (送料二錢)
中村武郎著	東西偉人逸話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞編輯部編	皇國軍人に戀ふ	定價十錢 (送料二錢)
陸軍中將 堀内文次郎閣下述	大西郷を語る	定價十錢 (送料二錢)
箱館小史著	百年後の人種戦争	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順著	政界財界膝栗毛	定價十錢 (送料二錢)
黒田正隆著	世界の景氣は何時爆發するか	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝區三田四町二番六 東亞書房

人を求むる新大陸は招く

満洲の就職手引き

定價二十錢 送料二錢

満洲へ雄飛して見たいがどうしたらよいか——と迷つてゐる人は本書をお読み下さい。本書はきつと貴方がたの良い道案内役を勤めるでせう。小學出も、中學出も、専門學校出も、乃至大學出も、又は現在職を持つて居る方も、新興國満洲の職場がどんな状態であるかを知つたならばきつと雄飛せずにはゐられません。

發行所 東京市芝區三田四國町二六
東亞書房

振替東京八八三八〇番
電話三田(45)三九八九番

満蒙事報社編 定價五十錢 (送料五錢)
満洲 官費 學校案内
給費

満蒙事報社編 定價二十錢 (送料三錢)
小資本で 満洲の職業 百五十
出來る 種調べ

満蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)
人を求むる新大陸は招く
満洲の就職手引き

月刊 満蒙事報
一部三十錢 (送料二錢)

覺悟せよ!!

次の大戦争

(定價十錢)

昭和十一年六月十三日印
昭和十一年六月十五日發 行

不許複製

著者 海南隱士
發行所 角田恒社
印刷所 玄眞社
東京市芝區三田四國町二六

發行所 東亞書房

振替東京八八三八〇番
電話三田三九八九番

鐵道各驛ホームスタンド一手販賣
鐵道保養會

Printed in Japan



東京
東亞書房
發行

3
5